



特集 「戦争の授業」のパラダイム転換

—「東京裁判史観」を超えて—

1982年の教科書問題とは何だったのか……高橋 史朗 80

「不戦」と「避戦」のあいだー日本型平和教育の原像……小西 正雄 84

「戦争」をとらえ直すための文献案内……安藤 豊 89

「近現代史」を読み解くキーワード「五箇条の御誓文」……占部 賢志 95

ー歴史の「通念」を検証する授業シリーズ・その①ー

〈人物読み物教材〉パル判事と東京裁判……上條 晴夫 100

「自由」と「国家」について……上原 卓 106

〈招待席／歴史と現代①〉「世間」と「社会」の相克……加藤 哲郎 110

■新雑誌『近現代史』の授業改革への期待と注文

「大東亜共栄圏」の研究を求む……柴田 義松 114

イデオロギー的歴史認識からの脱却を……宇田川 宏 114

二一世紀を見すえた「近現代史」の授業……薄上 泰 114

藤岡さんの志に賛同……中野 重人 114

学問と授業の接点の追究をしてほしい……有田 和正 114

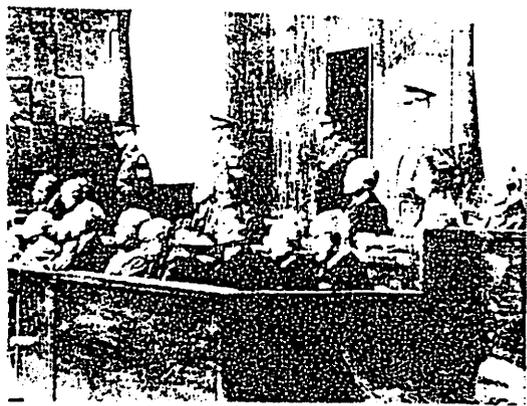
責任ある「子どもへの教育」を……向山 洋一 114

複眼的思考でディベート（建設的議論）を……松本 道弘 114

つまりは「史観」の問題……庄司 和晃 114

上啓一筆  
歴史教育に新しい流れを 中井清一／阪神大震災を体験してわかったこと  
と 吉永早苗／原爆展が中止された 松本 泉／原爆展中止への抗議は正しいか？  
小笠原幹夫／「全員一致」は民主主義か？ー「戦後民主主義」を疑う  
佐藤民男／「騙された」と思つて読んでほしい本 二杉孝司  
司／教師として反省すること 山之口公一

118



創刊の辞

《巻頭 問題提起論文》

「われわれの物語」をどう構想するか …… 斎藤 武夫 5

—「近現代史」をとらえ直す視点—

特集 「戦争の授業」のパラダイム転換—「東京裁判史観」を超えて

「戦争の授業」のパラダイム転換をどうはかるか …… 藤岡 信勝 12

—本誌創刊号の道案内をかねて—

「ストップ! パール・ハーバー!!」 …… 中島 優 18

「戦略論」は小学生にもわかる …… 杉田 久信 28

原爆投下は正しかったのか—チャールズ発言—でティベト 田畑 寿一 32

「あの戦争」(1941-45)を何と呼ぶか …… 江間 史明 46

—戦争呼称をめぐる大学生の討論—

日本とアメリカの「戦争の授業」はどこが違うか …… 佐々木雅男 52

家永二郎著『太平洋戦争』(岩波書店)を読み直す …… 森脇 健夫 56

戦時下の日本は「ファシズム」だったのか …… 庄司 章 60

—白井春男著『人間の歴史』テキスト批判—

〈講座II歴史の中の国際法①〉「侵略」「侵略戦争」 …… 佐藤 和男 66

「南京大虐殺二十万」説への五つの反証 …… 板倉 由明 71

# 「世間」と「社会」の相克

●私は藤岡氏の「史観」に賛同するものではない。「リベラル」が本物であるかどうかは、その「史観」の開放性と寛容性によると考える。

はじめに

藤岡信勝教授に頼まれて小論を寄せることにしたが、私は藤岡氏の「史観」に賛同するものではない。私は「平和憲法」を世界的に高く評価するから、「自国の安全保障」のための「軍事アレルギーの克服」や自衛隊強化・海外派遣には組みたくない。

「世界的な激動」には「地球市民」として対処すべきだと考えるから、「日本人の誇り」を出発点にした「戦略的思考」で「日本政治の混乱」が打破されるとは思わない。「東京裁判」コミンテルン史観」にも「大東亜戦争肯定史観」にも——それが実在するとすれば——反対だが、「自由主義史観」や「司馬史観」にも大きな疑問を持つ。「史観」よりも、「歴史」ヒストリー——そのものの発掘が重要だと思う。

一橋大学教授

加藤哲郎

サイクル史観の陥穽

「自由主義史観」の「導きの系」が「日本近代史の四〇年サイクル」といわれると眉に唾をつけたくなる。かつて大平内閣下で首相の私的シンクタンク「文化の時代の経済運営研究グループ」が、「明治維新以降の日本の歴史を見るときに、これをほぼ一五年刻みで、紛争・政治・経済・文化それぞれ別の時代ということもできる」としていたのを想起する。館龍一郎を議長とし、公文俊平・蠟山政道を幹事としたこのグループの「史観」は、こうであった。

「戦前については、一八八五年（明治一八年）からの一五年間は、近代化の枠組みがつくられた「政治の時代」であった。次の一九〇〇年（明治三三年）からの一五年間は、資本主義が確立した「経済の時代」

五年間は、大正文化、大正デモクラシーという文化の爛熟期である「文化の時代」、そして一九三〇年（昭和五年）からの一五年間は、不幸な軍事的「紛争の時代」であった。この時代は一九四五年（昭和二〇年）に終息する。

戦後最初の一五年間は、戦後の日本の進むべき政治的方向を画した「政治の時代」であった。この時代は、吉田内閣によって代表される。一九六〇年（昭和三五年）、池田内閣が所得倍増論を掲げて登場し、高度経済成長の時代が始まる。続く佐藤内閣の時代にかけて、「経済の時代」であった。この結果、日本経済は成熟し、高度産業社会に入り、人々は経済的豊かさの中で、より精神的・文化的な豊かさを求めるようになった。これを「文化の時代」の到来ということができる（大平総理の政策研究会報告書①「文化の時代の経済運営」大蔵省印刷局、一九八〇年）。

こうした「サイクル論」は、時の首相の演説草稿には便利だろうが、すぐに馬脚を現わす。一九七五—一九〇年ほどのような意味で「文化の時代」であったらどうか？一九九〇年—二〇〇五年は「紛争の時代」なはずだが、それは「五五年体制」崩壊・政界再編、バブル経済崩壊・円高複合不況、阪神大震災・サリン事件などを含意するのうか？一五年を四〇年に代えて「成功・失

「資本主義の全般的危機」にも「ハルマゲドン」にも通じる歴史の解釈手法であり、せいぜい「視角」にすぎない。それよりは、無階級社会↓階級社会↓無階級社会の「唯物史観」やI・ウォーラーズテインの百年単位の「ヘゲモニーの循環」論の方が、地球大でのグローバルな構造を問題とし、一人の人間の一生では検証不可能だけに、まだしも「史観」にふさわしく見える。右のような意味においては、私はあらゆる「史観」に疑問を持つ。

### 岡田嘉子の越境と南京大虐殺

南京大虐殺の「犠牲者数」が問題になっているらしい。教科書記述だからだろうが、私は「問題は「数」の信憑性である」とは思わない。「今日、南京事件の存在自体を否定する者はほとんどいない」として学問的論争のある「犠牲者数」を問題にしているが、それは本当に歴史教育の焦点たりうるのか？ 大学生が「南京大虐殺」のコトバは知っていても実態をイメージできない現状から考えると、私には、個々の「証言」や「事実」を示すことの方が重要に思える。

たとえば私なら、「東京日日新聞」一九三七年二月四日の一枚の写真をとりあげる。「百人斬り、超記録、向井一〇六、一〇五野田、両小尉さらに延長戦」と題する有名な記事に付されている。その記事を

読めば、二人で殺した二一人の中国人の「いのち」がどのように扱われたかは瞭然である。記事を送った「浅海、鈴木兩特派員」の「視角」も見えてくる。この写真は「侵華日軍南京大屠殺暴行照片集」（一九九二年）の一枚にすぎない。より詳しく知りたい学生には、この写真集と当時の日本の新聞の併読を勧める。どういう「視角」で調べ、どういう「史観」を選択するか、ないし創造するかは、彼らにまかせる。

「近現代史」では、「事実」の収録・確定自体が難しい。南京大虐殺の例なら、私なら岡田嘉子・杉本良吉の樺太越境との同時に想いをめぐらす。一九三八年正月の、当時のトップ女優岡田嘉子と日本共産党員で演出家の杉本良吉の旧ソ連への越境は、「恋の逃避行」とも「コミンテルンへの密使」とも言われた。その「事実」を解釈できる資料は、ここ二三年でようやく集積されてきた。二人ともソ連越境直後に逮捕され、二度と一緒になることはなかった。「日本のスパイ」として杉本は三九年一月二〇日に銃殺され、岡田は十年のラーゲリ（強制収容所）生活を強いられた。

二人が「労働者の天国」ソ連にあこがれたのは事実である。それは幻想だった。二人共配偶者のある身で恋仲になり、今風に言えば不倫を許さない「世間」の現実から逃避した。最近発見された旧ソ連検察局の秘密資料には、二人の越境後の供述が残さ

れている（名越健郎「クレムリン秘密文書は語る」中公新書、一九九四年）。

それらを解析すると、岡田嘉子は「軍国主義のお先棒をかつがされる芝居に出なければならぬ」ことがたまらなかつた。杉本にソ連越境を持ちかけたのは二月の半ば、ちょうど「東京日日新聞」が南京日本軍の「百人斬り競争」を報じた頃である。そこから一九三七年当時の日本と中国とソ連の歴史に想いをほせる。軍部の横暴と自由の欠如、侵略と戦争、スターリン粛清——いずれの歴史も悲惨である。そこから「コミンテルン史観」や「大東亜戦争肯定史観」を拒否するのは容易である。

### 「世間と社会」という視角

だがむしろ、私には岡田嘉子や杉本良吉が気になる。彼らを幻想のユートピア・ソ連へと駆り立てた「世間」の眼差し、その国境越えを促した「社会」観に注目する。「史観」が問題にするのは、国家と社会の軌跡、「歴史」大きな物語」である。ザ・ヒストリーは、ハイ・ストーリー、政治支配・経済体制の交替やヒズ・ストーリー、男性指導者たちの歴史として構成される。それは、もともとロー・ストーリーズ、無名の人々の生活やハイ・ストーリーズ、女たちの生きた「小さな物語」の集積であるが、ある種の「社会」観によって「大きな物語」へと構成される。近現代史

においては、その「社会」が資本主義や社会主義という経済体制を軸に、民主主義・権威主義・独裁といった政治制度を軸に、総括され時期区分される。その過程で、「小さな物語」は概念に抽象化し、一人一人の「いのち」は「数」になる。

しかし、たとえば一九三七年の日本を、近衛内閣成立や日中戦争・日独伊防共協定のレベルではなく、「国体の本義」や「愛国行進曲」、企画院設置や南京占領・人民戦線事件のレベルにおき、そこに矢内原忠雄の辞職や岡田嘉子・杉本良吉の越境、川端康成「雪国」をも重ねあわせて見るとき、「歴史」は「物語」を再生する。あるいは「いのち」が復活する。そして、そこには実は、西欧化・近代化の過程で輸入された「社会」というよりも、日本に固有な「世間」の濃密な網の目が見えてくる。

「世間と社会」という問題設定は、西洋史家阿部謹也が近年の著作で繰り返し説いているものである（『西洋中世の愛と人格——「世間」論序説』朝日新聞社、一九九二年）。私自身は「社会と国家」（岩波書店、一九九二年）のなかで展開した。

本誌は「社会科教育」別冊だというのが、そもそも「社会」という日本語自体、明治維新後の「文明開化」「欧化」過程でヨーロッパ語の「シビル」(ソサイアティ)を翻訳する苦闘の産物であった。当時の日本には「世間」「仲間」「会」などの語はあつ

たが、「ソサイアティ」に相当する自由な諸個人の対等・平等なつながりはなかった。だから福沢諭吉は「西洋事情」で「ソサイアティ」を「人間交際」と訳したり、「世間のすすめ」で「下等な世間」と「上等な社会」を対置したりしなければならなかった。そのうえ「社会」は一八八〇年代に「ソサイアティ」の訳語として定着しても、「世間」からは冷たく扱われた。今でも新開の「社会面」に残されているように、「社会」は国家の統制の及ばぬ「その他」の領域であり、政治・経済・文化に分類できない事件や雑事であった。「社会問題」が「社会主義」「社会運動」を生み出すと、「社会政策」が必要とされ内務省「社会局」まで設置されるが、その「社会問題」の根底には常に日本的「世間」が伏在する。悪徳政治家は今日でも「社会」には責任を取らず、「世間をさわがせて申し訳ない」と曖昧な問題解決に逃げ込んでいる。

「社会科学」や「社会科教育」は、近現代の日本が西欧語の「社会」(ソサイアティ)になったと前提して理論を組立て「歴史」(大きな物語)を抽出するが、一九三七年の南京で二人の日本軍兵士が日本刀での「百人斬り」を競いあったり、後に朝鮮人従軍慰安婦を当然のものと受けいれたりしたのは、「社会」ならぬ「世間」の強固な規制抜きには考えられない。岡田嘉子や杉本良吉を日本からソ連越境へと追いやったもの

は、彼らのユートピア的「社会」観と現実の「世間」のギャップではなかったか？

そしてこの「世間」の構造は、阿部謹也の力説するように、「社会」に比べればきわめて排他的・差別的であり、「イエ・ムラ」原理や「タテ社会」「集団主義」「間人主義」でも十分に把握しきれない、独特なものである。無論こうした視角からすれば、そもそも福沢諭吉の想定した西欧「市民社会」の根底にも、それぞれの地域・エスニシティに応じた独特の「世間的なもの」が伏在していた。それは今日の西欧「社会史」研究が徐々に明らかにしつつある。

「文明化」(西欧化)近代化(工業化)経済発展(都市化)民主化の単線図式で覆いかくされてきた「小さな物語」への接近・集約の仕方が、今日の歴史研究・歴史教育に問われているのである。

### 歴史教育の前提を問うこと

だから、私に言わせれば、今日の「日本近現代史の社会科歴史教育」でまず問われるべきは、「日本」「近代」「社会」「歴史」「教育」のそれぞれの吟味である。

「日本」はいつから始まるのか、「日本人」という民族(「想像の共同体」)はどこからどのようなアイデンティティを持ってきたのか？日本の「近代」は本当に明治維新に始まるのか、藤岡教授に「目からウロコが落ちるような衝撃」を与えた尾藤正

英の近著「江戸時代とはなにか」(岩波書店、一九九二年)のように、日本「近代史」は江戸時代にまで遡るのだろうか?

「世間」は「社会」のなかにどのようにビルトインされているのか、むしろ「世間」という実体の表層を「社会」という名でとり繕っているだけではないか? 「社会」の語とほぼ同時に翻訳語として輸入された「会社」が、なぜ「日本社会」でかくまで大きな規制力を持つのか? その「会社」の内部に立ち入ると、実は「世間」の原理が効率的生産に組み込まれ、長時間労働・過労死に駆り立てているのではないか?

そもそも「歴史」大きな物語や「史観」は、「日本社会」という擬制を時々抽象して系統だてたにすぎないのではないか? 「小さな物語」に組み込まれた「世界断」や「世間の荒波・胸算用」は、「教育」するに値しないものなのか? 「社会史」の成果に依拠するならば、「こども」や「学校」や「教育」の観念自体が、「西欧近代」という歴史的時代の特定の領域的産物であることを、どのようにナショナルな「歴史教育」や「教科書」で扱ったらよいのか?

## リベラルとリベラリズム

政治学を専攻する立場からすると、「自由主義」リベラリズム」についても、同様な問いが発せられるべきである。「リベラル」が「自由」に、「イズム」が「主義」

に翻訳された瞬間に躍起する緊張関係が、自覚される必要がある。リンカーンの「人民の政治」の翻訳を問題にするのならば、「社会科学教科書」の科学用語・教育用語の多くが、実は「日本近代」の翻訳語であるか翻訳をくぐった転用語であることを、つまり西欧的思想をくぐっていることを、同時に考えるべきである。「戦略」という軍事用語を歴史教育に転用する時、どのようなバイアスがかかるかを吟味すべきだろう。「デモクラシー」が「民本主義」と翻訳されて一世を風靡したことの功罪、「クラシー」政体」が「イズム」主義」と同列におかれたことによる「大正デモクラシー」や「戦後民主主義」への作用も問題になる。

「社会科学教育」を問題にするのであれば、「世間」の解明は避けて通れない。「教育」を受ける子どもたちが日々生きてるのは、「世間」に育てようという親たちの期待と願望に囲まれた、「世間」性を濃密に帯びた「社会」なのだから。しかし、日本の「社会科学」は、「世間」を解剖する理論も方法も持ちきれない。さしあたりは西欧の概念や物差しを用いて、しかも「地球社会」とコミュニケーション可能なかたちで、思考し研究し教育するしかない。「歴史」を「大きな物語」にまとめあげ、「史観」で解釈・説明することは、「教育」の場では避けられず、便利であろうが、無名の人々や女性たちの「小さな物語」を媒

介にしなければ、子どもたちの日常生活世界「世間」には浸透できないだろう。

そして、「小さな物語」は日々積み上げられ、表舞台から消えていく。にもかかわらず人々は、「自分の歴史」を「自分たちの歴史」と関連づけ意味づけようとする。私は近年、学問的意味での「コミンテルン史観」の歴史的生成根拠を探り、その問題性を指摘してきた(『東欧革命と社会主義』花伝社、一九九〇年、『コミンテルンの世界像』青木書店、一九九一年、など)。藤岡教授が小論を依頼してきたのも、おそらくそれが、多少とも「自由主義史観」に役立つと「戦略的」に考えられたからであろう。私は「自由主義」の存在根拠を否定しないが、「史観」にすることを拒否する。マルクス主義の遺産も「リベラリズム」と接合しようと試みる(拙稿「現代マルクス主義とリベラリズム」『レヴアイアサン』第一三号、一九九三年秋)。歴史の「小さな物語」に改めて執着し、多国籍企業時代の「ナショナルリズム」を超えた「地球市民」への道を構想している(『モスクワで甦醒された日本人』青木書店、『国民国家のエルゴロジー』平凡社、共に一九九四年)。「リベラル」が本物であるかどうかは、その思想や「史観」の開放性と寛容性にある、と私は考える。本誌がそのような場になりうるとすれば、それは「世間」にながしかのインパクトを持ちうるだろう。

# 「近現代史」の授業改革 第2号 (10月初旬刊) 予告

## 特集 世界史の中の日露戦争

〈巻頭 問題提起論文〉日露戦争の世界史的意義  
 近代日本と日露戦争をどう教えたか (小学校)  
 日露戦争—日本海海戦の勝因 (中学校)  
 伊藤博文、安重根、そして石川啄木 (中学校)  
 「戦争は人間を狂気に駆り立てる」か (高校)  
 —歴史の「通念」を検証する授業シリーズ・その②—  
 日露戦争—開戦か非戦か (大学)

〈人物読み物〉小村寿太郎/伊藤博文/東郷平八郎/与謝野晶子

日露戦争はどう教えられてきたか  
 世界の教科書は日露戦争をどう描いているか  
 〈講座=歴史の中の国際法②〉「最後通告」「戦時国際法」  
 〈歴史再現ディベート〉「日本はハリマン提案に賛成すべし」  
 夏目漱石と日露戦争後の日本  
 〈特別講座〉近代日本の国際環境—日露戦争後の世界  
 「日露戦争」をとらえ直すための文献案内

\* 投稿歓迎 \*

戦争は避けられなかったか—「国際連盟脱退」後にもあった可能性  
 パネル「南京事件」の真実とは  
 〈招待席・歴史と現代②〉

### 編集後記

★「近現代史」の授業改革をテーマとした雑誌を出そう——と明治図書 of 江部 樋口両編集長からおさそいをいただいたのは、昨年の8月24日、まだ暑い盛り頃でした。あれから約一年。このような形で本当に実現することになりました。時代の動きをよみとる両氏の慧眼に敬服しております。★上條さんの人物教材、表紙ウラの写真とあわせてすぐ教室でお使い下さい。まだまだ教室レベルの話になっていないとおしかりの声が耳にひびいて来ます。三号までには必ず教室実践に届く内容に発展させます。見守って下さるようお願いいたします。★加藤哲郎先生には、本誌の問題意識とは違った立場からのご寄稿をいただくことができました。「招待席」は、異質な声を響かせる場、本誌への批判も含め自由に発言いただくスペースとします。独善的にならず異論に耳を傾ける姿勢を私たちが失わないために大切な企画であると考えております。★ともかくたくさんの方々のお力添えのお陰で、本誌創刊にこぎつけることができました。ありがとうございます。(藤岡信勝)

★自国の歴史を学習してきて、自分の国に嫌悪感を感じてしまふという中学生のレポートを読んで、暗い気持ちになった。近現代史教育は、中学生に「自分の国にいやになってしまふ」という感想を抱かせる結果になったということとは、どういうことか。この感想は、「現代教育科学」の七月号の特集に掲載されている中学生のレポートである。★戦後五十年を契機に、世界史の中で日本を見直し、新しい史観を提示することが必要ではないかとする議論が高まっている。確かに、満洲事変から太平洋戦争とくり、この間日本は中国、東南アジアをはじめ各地に侵略の手を広げ残虐行為を繰り返してきた、とする「侵略史観」が圧倒的に優位を占めている。現在では、中学生が自国の歴史に失望感を感じても致し方ないともいえる。

★日本人は悪人説の近現代史では中学生に自国の歴史に失望感を与えてしまふ。だからといって自国の歴史を美化しても始まらない。「近現代史の授業改革」でその間のジレンマをどう解決するか、私も追及したい。

★6月10日の朝日の記事に「TBSのオウム報道特集にサブリミナル手法が使われていた」という記事がありました。(サブリミナル手法とは、直接は知覚されない刺激で、潜在意識に働きかけること)「なるほど、ありそ」と思いつつページをめくると、田無市の柳沢小で、男性教師が日の丸の旗を降ろしたとした問題をめぐり、教育長が「日の丸の掲揚という」校長の職務権限を力で排除することは許されない」と述べた。「今後、もきちんと行われるよう…」などと述べた——とあります。続けて「教諭の処分を心配する児童の父母らが、文書公開条例によって公開を求めた」とも。

私には、わずかなスペースで、などを2回も続けて書くことで、「日の丸掲揚を求める教育長側をウサン臭い」というか、ダメーじっぽく印象づける」それこそ、活字による、サブリミナル手法活用例ではないか、と思えてなりません。

同じ目線で書くなら「処分を心配した父母らは報告書の公開を求めている」という」とても書

社会科教育 9月別冊 通巻412号) 近現代史の授業改革 1 特集「戦争の授業」のパラダイム転換 —「東京裁判史観」を超えて—  
 発行所 明治図書出版KK 東京都豊島区南大塚 2-39-5 〒170 振替東京00160-5-151318  
 営業開発センター TEL 048-256-1175 編集室 TEL 03-3946-3151  
 1995年9月20日©1995